甲状腺外科草子 74　承前

北条氏綱の五箇条

杉野　圭三

後北条氏の二代目氏綱は北条早雲（伊勢宗瑞、伊勢新九郎盛時）の嫡男である。

早雲の跡を継いだ氏綱は相模を平定したが、周囲の扇谷上杉・山内上杉氏、武田氏などの敵対勢力との困難な攻防戦が続いた。

天文 7 年(1538 年)、第一次国府台合戦の緒戦では士気の高い公方軍に北条は押されたが、最終的に大勝利を収め、武蔵南部から下総、上総にかけて勢力を拡大し、南関東一帯の覇権を確立した。

北条五代記

北条氏綱（1487－1541）

領国経営に関して氏綱は早雲の四公六民の年貢制を維持、安定した郷村支配を継承、独自の施策として伝馬制度を復活、領内の物流・輸送の整備や検地を行い直轄地の設置や領内を治める信頼される代官を任命した。

氏綱は早雲と同様に三代目氏康に遺訓を残している。原文は長いので一部のみ記す。

北条氏綱の五箇条

序文：其方儀、中略、古人の金言名句は聞給ひても失念之儀あるへく候。親の書置事とあらは心に忘れかたく可在哉と、如此候。（親の書置きなら忘れないだろう）

一、大将によらす、諸侍迄も義を専に守るへし、義に違ひてハ、たとひ一国二国切取たりといふ共、後代の恥辱いかゝわ、後略　（大将から侍にいたるまで、義を大事にせよ、義に違えて国を取っても後世の恥辱を受けるだろう）

一、侍中より地下人百姓等に至迄、何も不便に可被存候、惣別人に捨りたる者ハこれなく候、器量・骨柄・弁舌・才覚人にすくれて、然も又道に達し、あつはれ能侍と見る処、思ひの外武勇無調法之者あり、又何事も無案内にて、人のゆるしたるうつけ者に、於武道者、剛強の働する者、必ある事也、たとひ片輪なる者なり共、用ひ様にて重宝になる事多ケれハ、其外ハすたりたる者ハ、一人もあるましき也、その者の役立処を召遣、役ニたゝさる処を不遣候而、何れをも用に立候を、能大将と申なり、中略、大将はいかなる者をも不便に思召候と、諸人にあまねくしらせ度事也、皆々役ニたてんも立間敷も、大将の心にあり、後略。（侍から農民にいたるまで、全てを慈しみ、才能に合わせて使いなさい。片輪でも使い方では重宝になることも多い。捨てるような人はいない）

一、侍者驕らす諂らハす、其身の分限を守をよしとす、 後略。（驕らずへつらわず分相応の振る舞いをせよ）

一、万事倹約を守るへし、後略

一、手際なる合戦ニて夥敷勝利を得て後、驕の心出来し、敵を侮り、或ハ不行儀なる事必ある事也、可慎々々、如斯候而滅亡の家、古より多し、此心万事にわたるそ、勝て甲の緒をしめよといふ事、忘れ給ふへからす、 右、堅於被相守者、可為当家繁昌者也、（勝利による驕りに注意！勝って兜の緒を締めよ）

特に注目すべきは**第二条の人材活用**である。指導者たる者は各個人に合わせた使い方が重要で優秀に見えても短所があることもあり、障害者や才能が無いように見える人物も意外な才能を発揮することがある。適材適所の重要を説いている。第五条は有名な**「勝って兜の緒を締めよ」**である。

この五箇条は早雲の廿一箇条を土台として発展させたものであり、教訓を次世代に伝える素晴らしいものである。名指導者の息子もまた優れた指導者であった。

参考資料：戦国北条記、Wikipedia、小田原城天守閣

（　一甲状腺外科医の徒然なる随想　）

2023 年 9 月 7 日